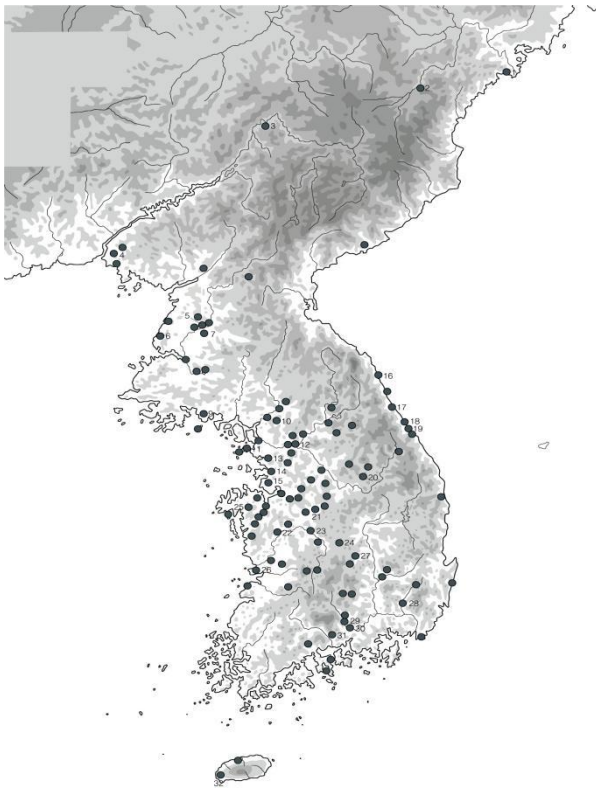


韓半島新石器時代集落の展開と生業の変化

林 尚澤 (釜山大學校 考古學科)

I. はじめに

韓半島新石器時代集落遺跡は現在、100余りが知られていて、最近、南韓の中西部地域を中心として集落の調査事例が増大している(図1)。本格的な集落遺跡は新石器時代早期(6000~4500 BCE)から出現して、後期まで全国的に分布するが晩期(2200~1300 BCE)になると急速に減少する。集落遺跡は内陸と海岸に均等に分布しているが、大小の河川の沖積地や自然堤防、低丘陵を主な立地としている。東海岸地域では海岸・砂丘に集落が分布するケースもある。集落の規模は5基未満の小規模なものから20基以上の大規模な集落に至るまで多様であるが、大部分は10基未満である。北韓地域や西南部地域は遺跡の分布が少ないが調査の密度の差によると考えられる。南海岸地域は数多くの調査例があるにもかかわらず、未だ本格的な集落遺跡は、ほとんど確認されていない。本発表では時期別の住居址の特徴と集落の展開過程について検討していくことにしたい。



(本稿で触れた遺跡の遺跡名を提示)

1. 西浦項 2. ポミクソク(虎谷洞) 3. 土城里 4. 龍淵里 5. 南京 6. 弓山 7. 金灘里 8. 智塔里 9. 蘇井里 10. テノン里 11. 雲西洞、雲北洞、中山洞、三木島 12. 岩寺洞 13. 陵谷洞 鳥耳島 14. 新吉洞 15. 石橋里 16. 鐵樋里 17. 鰲山里 18. 地境里 19. 草堂里 20. 新月里 21. 鳳鳴洞 22. 鶴岩里 23. 官坪洞 24. 大川里 25. 機池里 26. 長岩里 27. 松竹里 28. 琴川里 29. 上村里 30. 平居洞 31. 牧島 32. 高山里

図 1 韓半島新石器時代集落遺跡分布図

II. 韓国新石器時代時期と地域区分

韓半島新石器時代は物質文化(主に土器)の特徴から大きく東北・西北・中西部・中東部、南部地域に分けられる。東北と西北地域は平底土器の伝統を持つ地域であり、清川江以南の地域は時期により早い段階には平底土器伝統(東海岸と南海岸)に属するが、遅い段階は尖底土器伝統が見られる。時期区分は草創期~晩期の6段階編年が一般的に通用している。(表 1)。

西 北		中西部		南 部		中東部		東 北		時期			
				高山里様式						草創期			
美松里様式				東三洞 様 式	1期	鰲山里 様 式	1期		原ボイスマン期?	早 期			
					2期		2期		西浦項1期				
					3期				ボイスマン 2-4期				
					4期				西浦項 下層様式		ボイスマン 2-4期		
盤弓里 様 式	1期	弓山 様式	1期	瀛仙洞 様式		鰲山里様式? 地境里様式?		西浦項 下層様式	ボイスマン5期	前 期			
	2期		2期						西浦項2期				
堂山上層様式			3期	水佳 里 様	1期	地 境 里 様 式	1期 2期		西浦項 上層様式	西浦項2-3期	中 期		
					2期		3期			西浦項4期		後 期	
新岩里 様 式	1期				4期		3期			4期			
	2期												
	3期								晩 期				

表 1. 韓半島 新石器時代土器様式併行関係 (林尚澤 2017 表 2 一部 修正)
(スクリーンは、北東アジアの押捺・隆起文土器の伝統と沈線文土器伝統を区分したもの.)

III. 韓国新石器時代集落の展開様相

1. 時期別住居址の特徴

1) 草創期の住居址?

草創期の住居址と見られているのは済州島 高山里遺跡が現在唯一の例である。平面プランが円形または楕円形の竪穴住居址が39基報告されていて2〜3基程度が集まっている配置を持つ。住居址中央に土壌があり、壁に沿って小ピットと周溝を配置する形態が一般的である。住居址の規模は直径2〜5m内外で、3m前後のものが多い(図2-1)。内部からは草創期を代表する高山里式土器と石鏃等各種石器が出土している。住居址と土壌の木炭と土器に対する絶対年代の測定値は最も古いもので18点 が7,600 BCE内外を中心に多く分布している。しかし、この遺跡からは早期隆起文土器段階以降の土器が確認されていて、紀元前6,000年期以降の絶対年代も多数測定されている。それに本遺跡からは住居址以外にも竪穴670基、野外炉址 9基など新石器の遺跡としては類例がないほど数多くの遺構が報告されている。狭い面積の中に多数の遺構が重複して確認されている点、総ての遺構内部の土器が単一であるという点、住居址と竪穴の遺物の出土様相に違いがない点、早期の段階でもこのような大規模な集落遺跡が全然確認されていない点、遅い時期の絶対年代測定値が確認された遺構からも高山里段階の土器と石器のみ出土していて、遅い段階の遺物は確認されていない点などから、この住居址群が果たして該当期の遺構として見る事ができるかという問題に対して大きな論争が起こっているのが実情である (ハンムベ 2016, ソンヨン 2017)¹⁾。

2) 早期 住居

議論の多い高山里を除けば、草創期の段階の集落遺跡は未だに確認されていない。早期 (6000〜4500 BCE) になれば 東北・西北・中東部と南部地域では竪穴住居址が確認されている。中東部地域の鰲山里C地区からは早期の中で、時期を異にする二つの段階の竪穴住居址が確認され

1) 高山里の最下層 (5層)は火山碎屑層であるが、自然屈曲面が多いという特徴を持つ。 この上に自然堆積した様相を遺構と誤認したという反論が隣接地区を発掘した他の調査団によって提起されている。(済州考古学研究所 2016)。

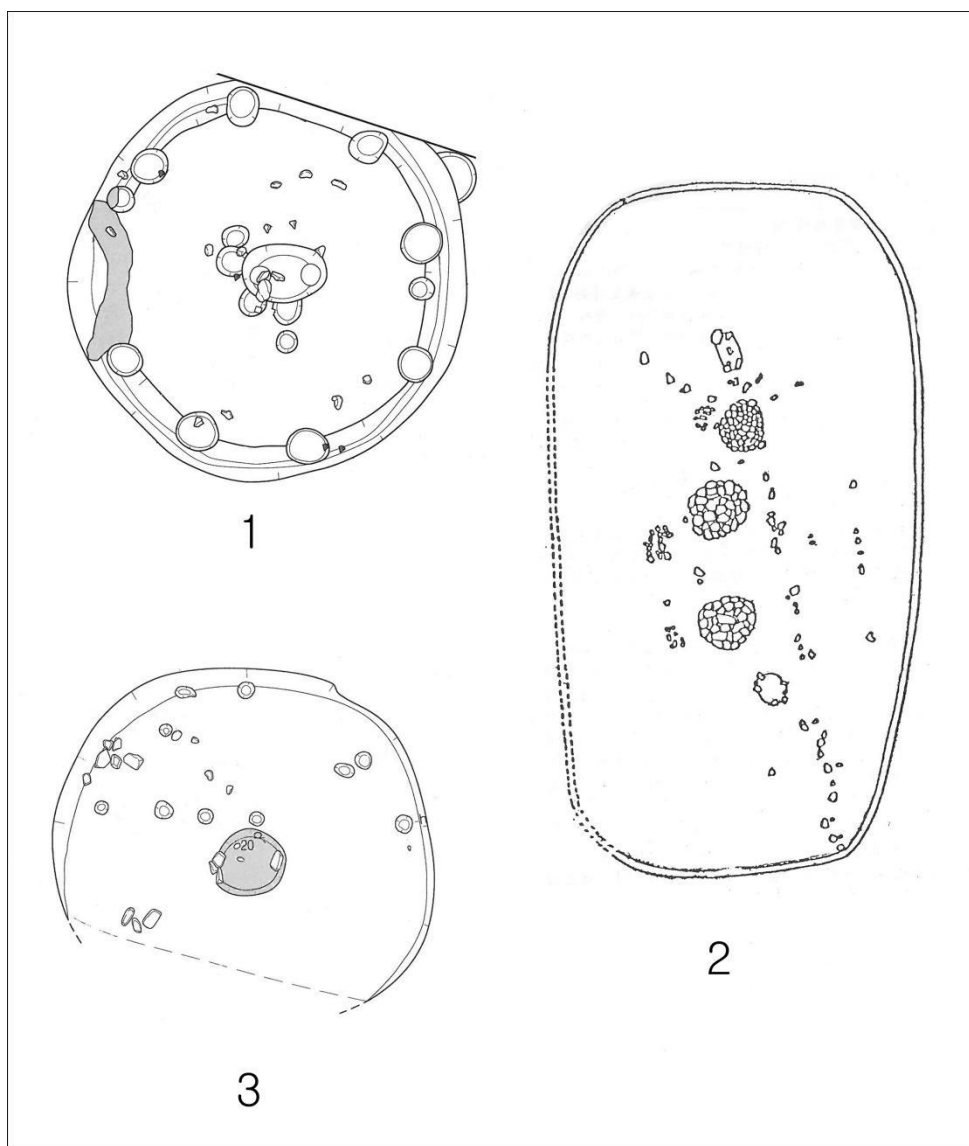


図 2 草創期と早期住居址
(1. 高山里 2. 西浦項 3. 鰲山里 C)

ている。鰲山里下層式土器が出土している層位からは平面プランが円形の石囲炉跡を伴う住居址2基(6750±30 bp)が確認されている(図 2-4)、隆起文土器が出土する層から平面プランが方形で石囲炉を持つ堅穴住居址 4基(5750±25 bp)が確認され住居址の平面形態の変化が窺える。1980年代、鰲山里遺跡に対する発掘調査を通して地上住居址の存在が主張された事もあったが鰲山里C地区発掘成果を見れば、この時期はやはり堅穴住居が使われていたと見るのが合理的であろう¹。中東部地域には初期段階に堅穴住居址からなる確実な集落遺跡が確認されている点が注目される。住居址内からは多量の完形土器と石鏃、錘、結合式釣針の軸部、石斧類などが確認されていて、狩猟採集集団の道具の様相をよく示している。

東北地域では西浦項遺跡から大型の長方形住居址が確認され、内部からは炉址も5基が確認されていて周辺の様相と比較した場合、特異な形態である(図 2-2)。西北地域は韓半島の中では、

¹ 鰲山里A, B 地区の地上住居は砂丘に形成された住居址の壁が流失した結果、残ったものとみるべきだろう。

この段階の集落は確認されていない。

南海岸地域では隆起文土器を出土する住居址が貝層から1～2基程度確認されているに止まっている。集落内の住居址と見るより貝層と関連した短期間のキャンプである可能性が高い。東北地域の特異な例を除外すれば早期段階の住居址は円形と方形の平面プランを持っていて、内部に石囲炉を持つことを特徴とする。多数の住居址で構成されている集落の存在は未だ不明確であり、鰲山里の早期の遅い段階の住居址 4基が今日までは最大の規模であり、後は1～2基の住居址だけが確認されていて集落の配置を論じる事は困難である。

3) 前期～中期の住居址

前期(4500～3500 BCE)には竪穴住居址からなる集落が本格的に確認されるようになる。まず西北地域では鴨緑江対岸の中国遼寧省丹東地域でこの時期の集落遺跡が確認されている。また、丹東の後洼遺跡からは31基の竪穴住居址が調査されているが、5基は大型方形住居址、それ以外は小型の円形住居址である。方形住居址の中には突出した出入口部を持つ場合もあり(図3-2)円形と方形の住居址すべての内部中央か片側に偏る石囲炉址が設置されている。一部の住居址は後述する中西部と類似していて一種の棚のような段が作られている。之字文土器が出土する住居址、韓半島西北地域はやはりこの分布圏に属していて、後窪遺跡を通して西北地域前期段階住居址の様相を見ることができる²。これ以外に盤弓里からは壊された住居址1基だけが調査されている。プランは方形と考えられ、中央には地床炉を持つ。前期の盤弓里様式1基(後窪上層段階の土器)併行段階に遼寧省「ボンケ」、太子河流域 馬城子遺跡からは洞窟住居が知られている。中期前半である小珠山中層併行段階では確実ではなく、中期後半 吳家村期併行の堂山下層が知られているが、住居址は確認されていない。

東北地域は西浦項遺跡の例がよく知られている(図 3-3)。前期である西浦項 2期には4基の住居址が報告されていて互いに約5～8mの距離を置いて配置され、石囲炉あるいは掘りくぼめた地床炉を持つ円形住居址(直径4m 以上) 3基と石囲炉の隅丸方形の住居址 1基で構成されている。中期の3期の住居址は 9基が報告されている³。およそ方形平面であり石囲炉もしくは、掘りくぼめた(竪穴式)炉が中央、或は中央から若干偏って位置している⁴。

中西部地域ではやはり尖底櫛文土器を所有する狩猟採集民による本格的な集落が形成されている。⁵ 代表的な遺跡としては智塔里、弓山、岩寺洞、雲西洞、テノン里などがある。集落は早期までの小規模集落を超えて、大・中・小規模の集落が丘陵と河川の岸など各所に分布している。雲西洞2地点とテノン里遺跡は、単一丘陵内にそれぞれ58基と39基となる大規模集落が重複する事なく形成されている⁶。住居址は一部の円形住居址を除外すれば、大部分が方形プランで石囲炉または掘りくぼめた中央に位置する炉址を持っている。雲西洞からは一種の棚上施設と考えられる段施設(ベット状遺構)が、確認されている(図 3-1)。柱穴は基本的に四柱式であり、出入口部は特別には設けられていない。持つ場合は突出式である。住居址の規模は一辺2～5m内外のものが大部分である。このような住居址の構造は中西部地域では後期まで継続される。

中西部の中期(3,500～3,000 BCE)になると、大同江流域と漢江以南の地域に新たに異なる土器文化が展開する(弓山様式 金灘里1類型と岩寺洞類型 林尚澤2017)。これとともに、住居址の形態もまた違いが現れる。大同江流域は金灘里遺跡の例のように長方形住居址に方形の粘土帯

² 後窪遺跡と小珠山下層遺跡は、絶対年代がおおよそ紀元前4700～4300年ほどで(張雪蓮 外 2016)韓半島の編年上、前期の早い段階ぐらいに該当する。

³ 互いに重複した住居址 (12号と13号、27号と28号、29号と30号)がありすべてが同時期ではない。

⁴ 26号住居址からは完全な姿の犬の骨が2体確認されている。

⁵ 中西部の集落は前期の後半段階が中心となる。

⁶ 最近の研究によれば、雲西洞はおおよそ3段階に分かれる (シンドンシ 2013, キムジエツン 2017)。しかし、重複が確認されていない点から後続の住居址が築造された時に、既存の住居址を認知した状態で一定の間隔を置いて築造したことが分かる。このように重複なく築造されたものは、中西部の集落の特徴の一つである。

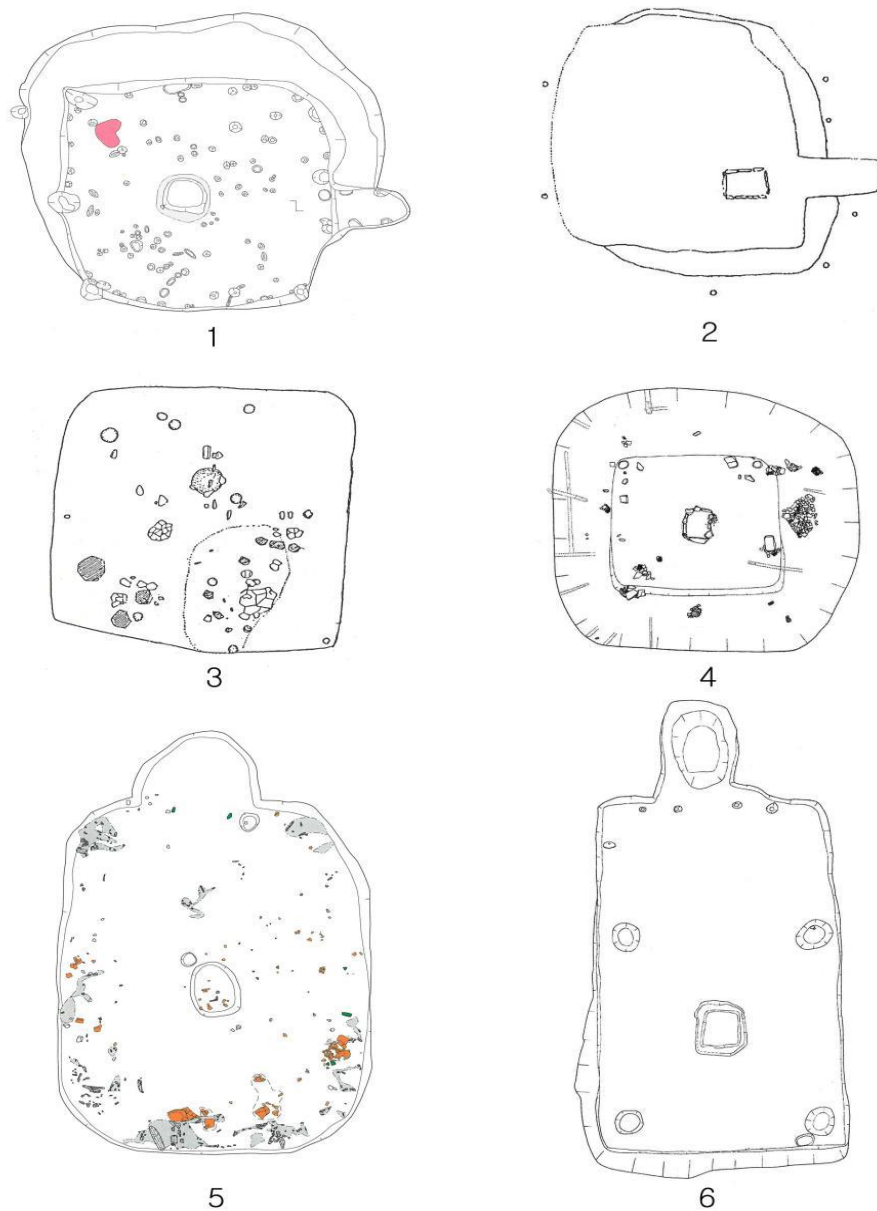


図 3 前～中期の住居址

(1. 雲西洞 2. 后洼 3. 西浦觀項 4. 地境里 5. 平居洞 6. 官坪洞)

による炉址を持つ新たな形態の住居址が出現する。一方、漢江以南の地域の陵谷洞や新吉洞、石橋里、三木島Ⅲ遺跡などでは大部分が20基以上の大規模集落であり、住居の構造は方形プランで掘りくぼめた(竪穴式)炉を持つ点は前期と同一である。岩寺洞もやはり中期まで占有されたものと考えられるが、方形の平面に石囲炉など前期と住居址構造に違いはみられない。前期に見られた段状施設は、やはり三木島Ⅲ遺跡でも確認されている。前期と比較した場合、住居構造や土器の側面から、大同江流域において新たな変化が引き起こされたと考えられる。

中期になると中西部尖底櫛文土器集団文化が中東部と南部地域に大規模拡散するが(林尚澤 2006)、中東部では江陵 草堂洞や地境里遺跡から確認ように、中西部と同一の方形プランに中央部に石囲炉を持つ住居址を伴う集落が登場する(図 3-4)。出土遺物は同様に中西部と基本的

に同じという点は言うまでもない。中東部の新たな集落の登場は、住居の構造や遺物を根拠として中西部集団の移住によるものと説明できる(林尚澤 2006)。

これに対して、南部地域は中期に平居洞や上村里、松竹里遺跡の例のように長方形プランに中央あるいは中央から短壁側に若干偏った地点に堀くぼめた(竪穴式)炉址を持つ住居址が現れる(図 3-5)。周溝は壁に沿って配置しているか壁から中に一定幅入り込んで配置されるのが特徴である。段状施設が取り付けられた住居址も確認されていて、長辺の長さが8~9mに達しており、同時期の中西部地域の方形住居址に比べてかなり大きい点が特徴的である。土器は中西部尖底櫛文系統のものであるが、既に在地化した形状が多く見られる。壺型土器、小型土器と彩色土器は南部 地域 早・前期以来の伝統が継続している。このことから南部地域の場合は在地集団が中西部 地域 伝統の集団と相互に影響を受けるなかで、自身の特徴を持つ住居址が構築されたと判断される。南部地域 前期段階の住居址は東三洞と松竹里遺跡から円形と長方形の平面形の竪穴住居址が、それぞれ1基確認されているだけである。

中期の遅い段階になると中西部の中でも南側にあたる忠清地域を中心にして丘陵上に大型の長方形住居址が出現する。「大川里式住居址」(具滋振2007, 2011)と呼ばれる長壁が10m内外の大型住居址で内部には粘土帯の形態の方形炉を持っている。短壁側に突出した入口施設側に突出型の出入り口施設が整えられている(図 3-6)。大川里式住居址は、特異なことに大部分が単独で存在している。このように前期以降に韓半島では初めて一定の規模以上の竪穴住居址を伴う本格的な集落が各所に形成し始める。前期に方形あるいは円形プランの住居址に石囲あるいは堀りくぼめた(竪穴式)炉、主に中期になると地域により長方形プランの住居址が出現し始め、炉もやはり石囲炉、堀くぼめた(竪穴式)炉、粘土帯式炉など多様である。

4) 後期～晩期の住居址

後期(3000~2200 BCE)の集落は平面プランと内部施設から中期から継続する様相も確認されるが、これと共に長方形住居址が多くなるという特徴も確認できる。例えば、中西部の京畿道や忠清道地域では仁川 中山洞や 瑞山 機知里のような方形プランで堀くぼめた(竪穴式)炉を持つ4柱式の住居址は継続している(図 4-4)。中東部も、やはり4柱式の方形住居址が持続している(図 4-5)。一方、平安南道と黄海道地域の南京や蘇井里遺跡からは後期に廊下状の長い出入り口を持つ長方形住居址が流行する(図 4-3)。このような住居址は、内部に粘土帯式の方形または長方形炉を持っている。東北地域の西浦項でもIV期になれば長辺が7mを超える長方形住居址が出現する。炉は中央から偏った位置に石囲炉もしくは、堀くぼめた(竪穴式)炉が確認されている。南部では中期以来の長方形住居址が継続している(図 4-6)。韓半島のほぼ大部分の地域では住居址の内、炉址は、中期以降流行する堀くぼめた(竪穴式)炉、または粘土帯式が見られるが、中西部や南部の一部からは石囲の炉を持つ住居址が確認される場合もある。後期段階の集落は中期以前と比較した時に規模の面から5基内外の小規模のものが多くという点が特徴的である。20基以上の大型集落は勿論、10基を超える集落もほぼ探すことは困難である。後期は韓半島内陸部と海岸に多くの遺跡が拡散する時期であるが、また、小規模集落の移住と再編を初期農耕技術の限界に伴う集団の周期的な移動と結び付け、移住経費の最小化戦略と分析する見解もある(林尚澤2006)。晩期(2200~1300 BCE)には集落 調査事例が非常に少なく、東北と西北地域の龍淵里、ポミクソク(虎谷洞、西浦項などから方形系の住居址内部に等間隔の柱穴を整然と配置した発達した形態で登場する(図4-1, 2)。中西部以南の地域では南部内陸の密陽琴川里の長方形住居址を除外すれば晩期段階の住居址の調査例はほぼ見られない。これに代わり野外炉址や土壇、貝塚などが伴う小規模単純 遺跡が散在している。竪穴住居址集落の晩期段階によく見られる現象は、単純に調査の密度の違いと見る事はできず、気候変化とこれに伴う環境変化などに関連して狩猟・採集・漁撈に初期農耕を加えた安定した生業構造に変動が生じて、集団の移動性が高まった結果であるとする解析もある(安承模 2006, 林尚澤2006)。

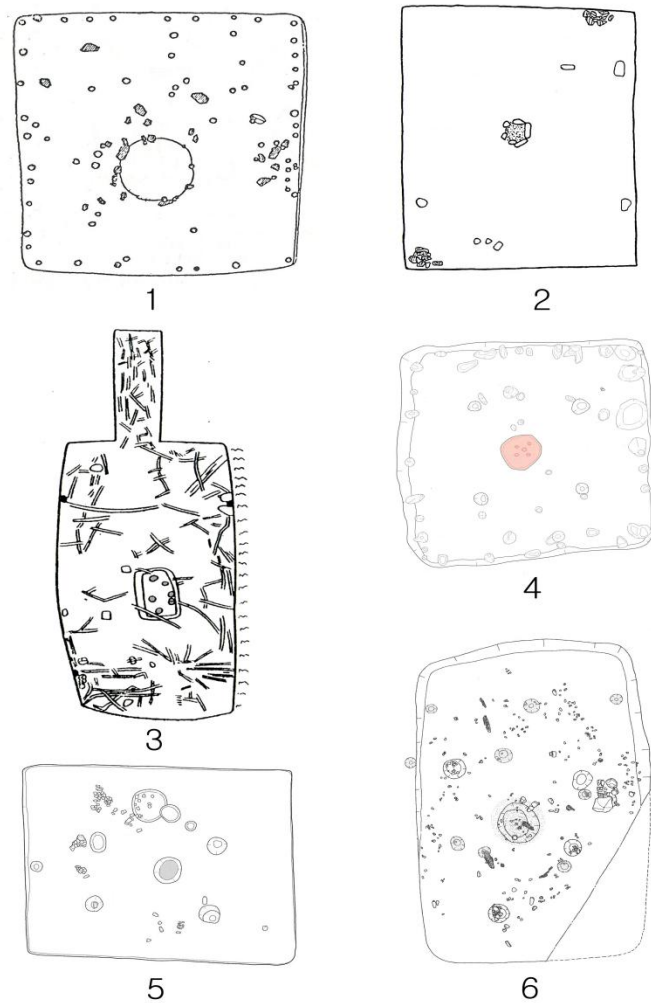


図 4 後期と晩期の竪穴住居址
(1. 西浦項 2. 土城里 3. 南京 4. 中山洞 5. 鐵槌里 6. 上村里)

2. 集落内住居配置 様相と集 体系- 中西部と南部の事例

1) 集落内住居配置-列状集落と塊状集落

中西部と南部地域を中心とした集落の配列状況を見てみると、韓半島新石器時代の集落は住居址の配列の特徴により大きく列状・塊状・点状 配置に分けることができる(林尚澤2010b)。研究者によっては地理学の区分案を受容して散村と集村に大別して、住居配置の状体により点状・塊状・線状・面状配置に区分する事もある(具滋振 2011、リサンヨン 2016、キム ジェソク2017)。列状配置は住居址が明確に列状に配置したものである(図 5-1)。仁川 雲西洞、坡州 テノン里、始興 陵谷洞、高城 鐵槌里遺跡などのように丘陵上に1~数列整然と配置されている住居址は相互間の重複はほとんどなく等間隔に配置されていて、同時に存在していたか少なくとも既存の住居址の配置を認識していて時間差をおいて順次、住居址が築造されたものと考えられる。列状配置は新石器時代前期から中西部地域を中心として明確に出現して、中東部地域では後期にも確認されている。列状配置は中国東北地域の集落の大きな特徴の一つである。興隆洼、趙寶沟、紅山文化に至るまで、中国遼西地域の主要新石器文化で整然とした列状配置が確認されている。このような列状配置は黄河中流地域の仰韶文化、あるいは 東日本の地域に見られる環

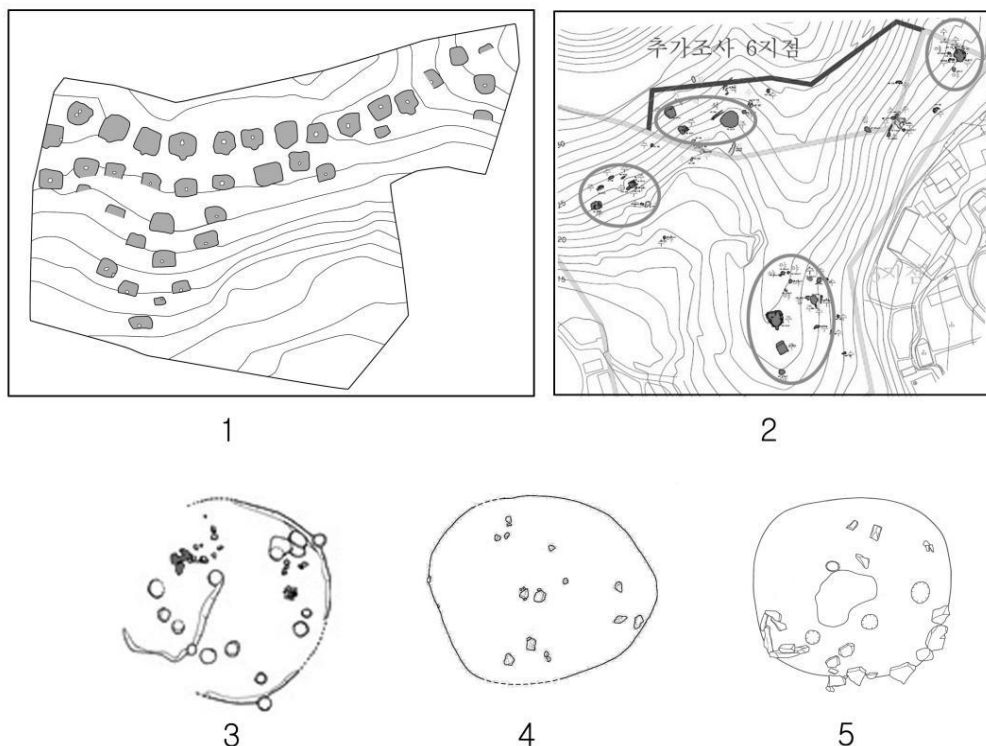


図 5 集落配置 (1, 2) と 野外キャンプ (3~5)

1. 坡州 テノン里 2. 仁川 雲北洞 3. 清州 鳳鳴洞 4. 泗川 長岩里 5. 河東 牧島

状配置とは明確に区別されるべき特徴である。現在、中国東北地域の集落配置が、韓半島 中西部地域の集落配置と文化的関連性があるかは不明確であるが、初期農耕が中国東北地域から韓半島当地へ波及した様相、農耕関連石器の類似性などから見た時に、生業と社会構造上の類似性から両地域に類似した集落配置が登場したという可能性を完全には排除する事はできない。勿論、集落の規模や環濠の有無などから中国東北地域と韓半島には大きな差が見られ、土器等の物質文化が本格的な違いが見られ、両地域 集落配置の類似性を集団の移住などを理由として説明することは出来ないと考える。

列状配置と区別される塊状配置は 住居址の配置で明確に列を確認することは出来ず、幾つか住居址が不規則に集まっている(図 5-2)。仁川中山里のように中西部地域後期の段階に集落のような例を見つける事ができ、前期や中期の集落の中にも明確な列を探せないものも多数みられ、これらも塊状配置の例として見る事ができる。後期になれば大規模集落ほぼ姿を消す現象と、列状配置の消滅と塊状配置の流行は軌道を一にする現象である(林尚澤 2006, 2010b、リササヨ 2006)このような集落配置上の変化が集落を営む集団構成の変化であるのか、生産と消費単位の変化であるのか、そうで無ければ生業上の変化を反映するものなのか、もしそうだとすれば、何故このような変化が発生したのかという点に対する研究は未だ不足した状況である。

点状配置は大川里式住居址のように丘陵上に一基の住居址だけが単独に存在している事例がある。現在、中西部の忠清道地域を中心として、中期後半以降に確認された独特の様相である。特に大川里住居址は大型の長方形住居址として同時期か以前の時期で一般的な方形住居址に比べて、面積では更に二倍以上、最大10倍以上に達する。規模だけ見れば、小型方形住居址数基が合わさったものであるが、これらは青銅器時代前期の住居址のように複数の世代が同一の住居址に居住する世代共同体単位の住居とみる事もできるが、内部の構造から見れば一つの炉址を中心とする居住空間と、一種の台所のような施設と物品の保管空間と区別されており、複数

の世代が居住していた住居と見る事は難しい。現在、このような点状配置を見せる大川式住居址の登場を、どのように解析したらよいのか疑問は尽きない。

南部地域では集落配置と構造を知る事が出来る遺跡として上村里、平居洞、松竹里など中期段階は4基の住居址を伴った集落があり、これらは列状に配置されている。住居址の間には大型の集石施設が2基確認されていて儀礼に関係する施設であると見られている。上村里の中期段階では13基の住居址が調査されているが、ほぼ同じ方向に主軸が向いているが、明確な列状配置を認定する事は難しい。平居洞と同様に大型集石施設が確認されているが、火葬施設と見られている。松竹里からは中期の遅い段階と考えられる住居址8基が確認されているが、確実な配置の様相は把握する事が難しく、一種の塊状、或は面状配置様相を示している。特異な点は住居址と貯蔵施設がセットとなっている点である。松竹里からも4基の集石施設が土器窯址と見られている。以上のように住居址と集石施設の存在が、西部慶南地域集落の主要な特徴である事がわかる。集落は中西部のように明確な列状配置が確認されない一方で、集石施設が集落の構成要素として位置付けられている点で区別される。

南部地域の後期は平居洞と上村里の様相を見れば共通点が確認できる。少数の住居址と共に数多くの土壙とピットが確認されているのが特徴的である。中期には見られない土壙とピットがどのような用途と関連づけられるかは不明確である。

2) 集落の規模と形成過程- 中西部地域 前・中期の事例

中西部から確認された前期～中期の大規模集落に対しては、住居址間の同時性の問題が集落の規模と形成過程を理解するために重要なポイントとなっている。南韓最大の集落遺跡である西海岸の永宗島 雲西洞遺跡の事例を通して集落の形成過程を見て行くことにする。シドミン(2013)は雲西洞遺跡の58基の住居址に対して出土遺物の様相、住居址の類型、出入り口の方向などを総合的に検討して住居址の同時性を判断した。これによれば、類似した文化構成、同一の住居址、類型、同一の出入り口方向を持つ住居址は互いに隣接して配置される傾向が観察され、同時期である可能性が高いとしている。この報告者は雲西洞集落を大きく二つの段階に分け、それぞれを段階別に2～4基の住居址に構成された小群の住居が存在しているとしている。そして各小群の住居址は基本的に列状配置(林尚澤2010b)である点を明確にしている。各小群内では大型住居址が1基ずつ確認されている。このような検討を通して雲西洞の集落は各段階別に最大15～20基程の住居址で構成された集落ということになる。このような規模は近隣の始興 陵谷洞、安山 新吉洞などから10～20基の住居址で構成された集落が確認されている点と、規模の面からも類似相が見られる。中西部地域の集落の住居配置の特徴の中で、最も明確なものは住居址間の重複はほとんど確認されず、一定の間隔をおいて配置されているという点と、配置形態が列状となるのが多いという点である。雲西洞は、やはりこのような特徴をよく示しているのと同時に、同時期とした住居址が小さなグループを形成しているという点を特徴とする事ができる。このような様相が中西部 前期～中期にかけて、一貫して適用される集落の特徴とまでは言えないが、主要な特徴である事は明白である。しかし、同時期の住居の間の細部的な時間差の存在の可能性は常に存在するので、集落の形成の上限と完成期との過程と最終的な集落規模に対しては、更なる詳細な検討を必要としている。

3) 集落体系⁷

集落体系という観点から中・後期 中西部と南部の住居の各連遺跡を観察すると住居址の平面形と内部の構造、遺跡規模、出土遺物から大きく幾つかのパターンに分けることができる。一

⁷ 筆者の言う集落体系とは、個別の集落内の住居と生産施設、貯蔵施設の配置など、単位としての遺跡の内部分構造的な側面としてではなく、生業戦略的レベルで単位集団が通年、あるいは一定期間占有していたと思われる様々なレベルの遺跡間の関係網全体を指す概念である。したがって、単位集団維持に必要な通年住居施設から特定資源を得るために短期間に占有する限定行為の場所に至るまで、様々な水準と性格をもつ遺跡を包括している(林尚澤 2010a)。

一般集落—小規模住居遺跡—限定行為所がこれに該当する。一般集落は複数の方形、或は長方形住居址とその他の施設(集石施設、野外炉址等)を伴っている。遺物も多様な活動を反映した土器と石器、装身具などが出土している。1~2基の住居址を伴う小規模住居遺跡は、遺跡の規模も小さいだけでなく炉址以外の構造は別に確認されない。平均的な石器の数量も一般集落に比べて非常に少ない。しかし、限定行為の場所に比べると遺物の数量が多い点で区別する事ができる。これとは異なり炉址や柱穴が無い場合もあり竪穴の深さが浅く、平面プランが円形や不規則な遺跡がある。即ち住居址の構造的側面を見ると構築に係る労働力の違いから一般住居址との差異点を見せている(図 5-3, 4, 5)。これらの住居址は遺物量も非常に少ない。このような事例は内陸と海岸の何れからでも確認できる。特に海岸に見られるこのような施設については貝層のセットが出現していて、貝類や魚類等の海洋資源獲得のために資源地域を訪れた人間が一時的に居住した野営キャンプ施設であると見るのが一般的である(林尚澤2006)。これ以外にも簡易住居施設も見られない野外炉址や小型の柱穴だけが確認される遺跡(貝層を含む)などが多数確認されている。このような遺跡はやはり資源獲得と処理と関連した短期間占有の産物と見ることができるだろう。このような遺跡類型は集落体系内で異なる機能を有していたと推定する事ができる。本拠地としての一般集落以外に、特定の目的で短期間占有する限定行為の場所、そして、その中間的な性格を持つ遺跡がこれに該当する。中間的性格の遺跡は一般集落に比べて占有の持続性は劣っているが、限定行為の場所に比べれば占有期間が長かったと見ることが出来き、この遺跡は一種の季節的占有のような性格が見られる。占有期間の差異、遺跡の性格の差異に起因して住居類型の違いは、新石器時代集団の生業と資源利用と関連した集落体系の一端をよく示しているものと理解できる(図 6, 7, 林尚澤 2010a)。

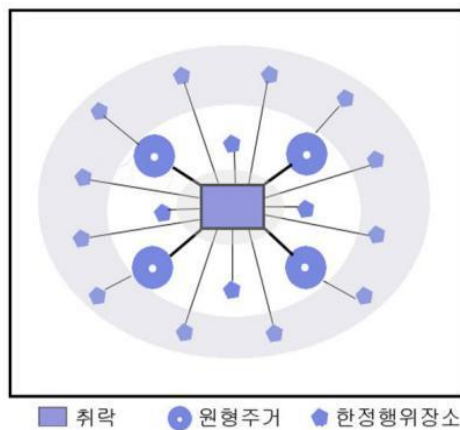


図6 中期 集落体系の模式図

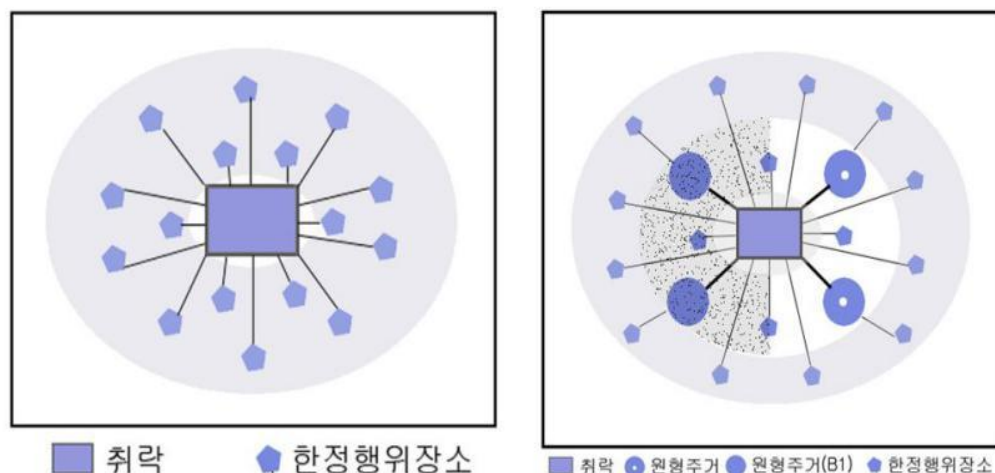


図 7 後期新石器時代の集落システム模式図(左:西海岸 / 右: 内陸)

最近では住居址構造、再利用の痕跡、集落規模、石器の多様性などを根拠として中西部地域後期集落が、海岸を中心とした大規模集落と内陸の小規模集落という相反するパターンで現れる理由について集団の集合と分散という観点から解析する研究も提示されている(메뉴 콘테 2019)。自然環境と連動したこのような集合-分散モデルは実際には 北米北西部などの幾つかの民族誌や考古学的事例から確認されていて、韓半島中西部の後期集落を説明する案案としてのモデルとして十分な可能性がある。

以上、見てきたように韓半島新石器時代の集落に対する研究は、個別の住居址に対する基礎的整理とタイプ分け、集落の配置様相と分類(列状 vs. 塊状 或は 点状 vs. 線状 vs. 面状 等)と時間的な変化の把握、集落体系に対する基礎的記述などに纏められる。しかし、集落の配置様相を基礎とした集落区の調査化、構造、領域圏と移動性に関する問題はほとんど取り扱われてこなかった。現在、議論が始まったばかりの段階に過ぎないのである。

例えば東日本縄文時代の環状集落と関連した従来の研究と多様な成果に照らしていた時(谷口康浩 2005)、韓半島の新石器時代の集落研究は非常に不振である点は事実である。これは集落考古学を本格的に研究するために基礎資料の蓄積が長期間遅々として進まなかったという点に相当な部分原因を求める事ができるが、2000年代以降、中西部地域を中心として相当量の集落が蓄積されている点から、もはや韓国においても新石器時代の集落研究が活性化される段階に入ったと判断される。

IV. 生業と集落

住居址の形態、集落構造とその規模立地などは該当集団の生業形態と人口、技術水準などと密接に関係して集落の変化も、やはり生業の変化と不可分の関係をもっていたとすることができる。そのような点から韓半島新石器時代の生業の変化と、集落の変化を合わせて観ることは意味がある。韓半島新石器時代の生業構造は 終始一貫して狩猟、採集、漁撈が中心となる点がよく知られている。時期により個々の生業活動の比重には変動があり、初期農耕が導入される等の変化も確認され、発表者はこの変化を新石器化(neolithization)の過程として把握して、大きく3つの段階の変遷を想定している(金壯錫, 林尙澤, 金鐘一 2011)。

新石器化の最初の段階は後期旧石器時代以に新たな技術体系が確立した段階である。高山里遺跡により代表される草創期段階に該当するが、細石器やエンドスクレーパー等の後期旧石器伝統の石器が維持されている中で、新たな土器、磨製石斧、磨棒と磨盤、多量の石鏃と 石鋸が使用された段階である。多量の石鏃と石鋸が見られるように、狩猟への依存度が依然として高い段階であるが、磨棒・磨盤や全面磨研石斧の登場等は、植物食料に対する利用強化の現象としても理解できる。

新石器化の二つ目の段階は海水面が安定して、海岸地域に貝塚が本格的に登場する早期と前

山里を除外すれば、全く竪穴住居を形成する集落は確認されておらず、本格的な竪穴住居址集落の段階として理解する事は難しい。相対的に移動性が高い段階であると考えられる。新石器化の二つ目の段階である早～前期 段階になると初めて明確な竪穴住居が登場する。東北地域の西浦項や中東部地域の鰲山里等から方形、長方形などの住居址が登場するが、未だ事例は多くはなく集落規模もやはり小規模であると判断されている。南海岸地域では未だ本格的な集落遺跡は確認されておらず、貝層から野营地と判断される施設が一部確認されているだけである。この段階に海洋資源に対する本格的な利用が強化され、相対的に遺物も豊富であるという点から定着集落の存在を十分に設定することができる。東北部と中東部の事例がこれに該当する。南部地域では、未だに集落の存在が不明確であるが、季節的居住を含む竪穴住居址の存在を期待して見ることができる。新石器化の三番目の段階である前期後半～中期段階は、韓半島全域に本格的な竪穴住居址を持つ集落の登場から始まる。中西部地域では大規模集落が確認され中東部と南部地域からも、やはり一定の規模以上の集落遺跡が数多く確認されている。このように本格的な集落遺跡が登場する要因は、植物性食料資源の利用強化と初期農耕の導入が大きな役割を果たしていたからなのであろう。

V. おわりに

以上、韓半島新石器時代の住居址と集落の様相を概略的に見てきて、集落の発展過程を生業の変化と関連させて説明を試みた。韓半島の集落の様相は、未だ資料が不明な地域と時期(例えば、全羅道地域、中西部の早期、南韓の末期の様相など)が多く明快に説明できないのも事実である。これまで基礎資料に関する整理と記述を超える論議が活発になされていないのが実情である。しかし、中西部地域を中心とした最近の活発な集落調査の進行とともに、住居地の同時性の問題、集落内部の構造に関する問題、集落形態の復元などについて、議論が徐々にではあるが進んでいることは喜ばしいことである。今後、住居と集落を通して共同体の内部構造を把握し、社会変化を説明する試みは積極的に行われる事が必要となってくるだろう。

参考文献

- 具滋振, 2007, 「我が国新石器時代 住居の地域圏設定と変化様相」『韓国新石器研究』 13
- 具滋振, 2011, 『新石器時代 住居と集落 研究』, ソギョン文化社
- キム ジェソ, 2017, 「中部 西海岸地域 新石器時代住居と集落構造の変化」『韓国新石器研究』 33.
- メティウ コンテ, 2019, 『韓半島 中西部地域 櫛文土器文化の拡散と移動性の変化-集落 占有様相分析を中心にして』, ソウル大学校 修士学位論文.
- パンソムベ, 2016, 「高山里遺跡 遺構の性格と定着農耕に対する検討」, 『文化遺産としての価値と活用法案』, 済州高山里遺跡 国際学術大会 資料集, 済州大学校博物館.
- ソ ナンソ, 2016, 『韓半島 中西部地方 新石器文化変動』, ソギョン文化社.
- ソ ナンソ, 2017, 「済州 高山里遺跡の編年と性格 -放射性炭素年代と遺跡再検討を中心として」, 『韓国新石器研究』 33.
- シンドボン, 2013, 『韓半島 中西部地域 新石器時代 集落構造 検討』, 釜山大学校 修士学位論文.
- 安承模, 2006, 「東アジア 定住集落と農耕出現の相関関係」, 『韓国新石器研究』 11.
- 林尚澤, 2006, 『韓国中西部地域 櫛文土器文化 変動過程の研究』, ソウル大学校 博士学位論文.
- 林尚澤, 2010a, 「新石器時代 集落体系の変遷と地域的比較」, 『東北亜文化研究』 24
- 林尚澤, 2010b, 「新石器時代 西海中部地域 相対編年と集落構造の特徴」『韓国上古史学報』 70
- 林尚澤, 2017, 「韓半島 新石器時代 土器様式の成立と変動」, 『考古学』 16-1号.
- 済州研究所, 2016, 『済州高山里遺跡(2区域) 文化財 発掘調査 簡略報告書』.
- 金壯錫, 林尚澤, 金鐘一, 2011, 「朝鮮半島南部の新石器化と景観の変化」, 『景観の大変容-新石器化と現代化』, 東アジア内海文化圏の景観史と環境 2, 昭和堂.
- 谷口康浩, 2005, 『環状集落と縄文社会構造』, 学生社.
- 張雪蓮 外, 2016, 「遼寧長海小珠山遺址考古学文化的年代序列」, 『考古』 5期.